

天正大判

「てんしょうおおばん」



金の品位は70～74%。写真の大判は、縦の長さが18センチ近くあり、天正長大判と呼ばれる

おかね今昔物語

「使う」「貯める」…それだけではありません
おかねは「昔」の暮らしのありよう
それを「今」に伝える物語です

楕円の板に墨書きのある金貨、「大判」。今月号で紹介する天正大判は、16世紀末に豊臣秀吉が彫金師・後藤家に命じて造らせた日本最初の金貨です。それまでに日本で造られた金貨は、重さや品質が一定せず、使うたびに秤で重さを量る必要がありました。天正大判は、重さや品質、様式などを一定することで、秤（はかり）がなくても使うことができる、画期的な金貨でした。

天正大判の大きさは、縦約17センチ、横約10センチで、「拾両、後藤」の文字と後藤家の花押（サイン）が墨書きされ、上下に桐の極印がみられます。「拾両」は重さ（44匁＝165グラム）を表したものでした。

秀吉が造らせた大判の形態は、江戸幕府に引き継がれ、江戸時代には5種類の大判が発行されました。

日本銀行貨幣博物館では、日本で使われてきた貨幣や貨幣の描かれた絵画、貨幣を入れる容器（千両箱・財布）など、貨幣に関するさまざまな資料を所蔵しています。その中から、和同開珎、大判・小判、千両箱や日本銀行券など主な資料を展示し、日本貨幣史を紹介しています。このシリーズでは、貨幣の歴史とあわせて、貨幣が使われてきた様子が見られる資料も紹介していきます。



〈日本銀行金融研究所貨幣博物館〉

東京都中央区日本橋本石町 1-3-1
<http://www.imes.boj.or.jp/cm/>

和同開珎

「わどろかいちん」



〔和同開珎（銅錢）〕

画像の和同開珎の主な材料は銅だが、銀銭も発行された。



〔和同開珎鑄型の表と裏〕

当館所蔵の和同開珎の鑄型は山口県（長門鑄銭司跡）出土と伝えられる。

山口県には古代の銅生産遺跡「長登銅山」がある。

おかね今昔物語

「使う」「貯める」…それだけではありません
おかねは「昔」の暮らしのありよう
それを「今」に伝える物語です



〈日本銀行金融研究所貨幣博物館〉

東京都中央区日本橋本石町 1-3-1
<http://www.imes.boj.or.jp/cm/>

「和同開珎」は、いまから約1300年前の708年（和銅元年）に発行されました。それ以前の金属貨幣として「無文銀銭」や「富本銭」が畿内を中心に少量出土していますが、和同開珎は初めて大量流通を前提に発行された貨幣です。当時の日本は中央集権的な国家を目指し、中国の制度や文化を積極的に取り入れていました。貨幣の発行は、国家の権威を内外に示すために、重要な役割を担いました。

和同開珎は平城京の造営など国家的プロジェクトに関わる人の給料や資材購入の支払いに用いられました。たとえば、平城京をつくる労働者には1日1文（1枚）が支払われ、労働者はこれを使って市場で買い物ができました。和同開珎1文で1合程度の米が買えました。

和同開珎の丸くて四角い穴があいた形は、中国の銭貨にならっています。和同開珎の鑄型からは、表と裏の鑄型を合わせ、溶かした金属を流し込む鑄造という方法で造られたことがわかります。また、鑄型の外側は粗い土で覆われていますが、銭貨の形を正確に写し取るため、金属を流し込む面には、きめの細かな土が使われています。このような銭貨の形や基本的な造り方は、約千年後に発行された江戸時代の銭貨でも変わることはありませんでした。

古代に発行された銭貨



神功開宝
(765年)



万年通宝
(760年)



和同開珎
(708年)



承和昌宝
(835年)



富寿神宝
(818年)



隆平永宝
(796年)



貞観永宝
(870年)



饒益神宝
(859年)



長年大宝
(848年)



乾元大宝
(958年)



延喜通宝
(907年)



寛平大宝
(890年)

おかね今昔物語

「使う」「貯める」…それだけではありません
おかねは「昔」の暮らしのありよう
それを「今」に伝える物語です



〈日本銀行金融研究所貨幣博物館〉

東京都中央区日本橋本石町 1-3-1
<http://www.imes.boj.or.jp/cm/>

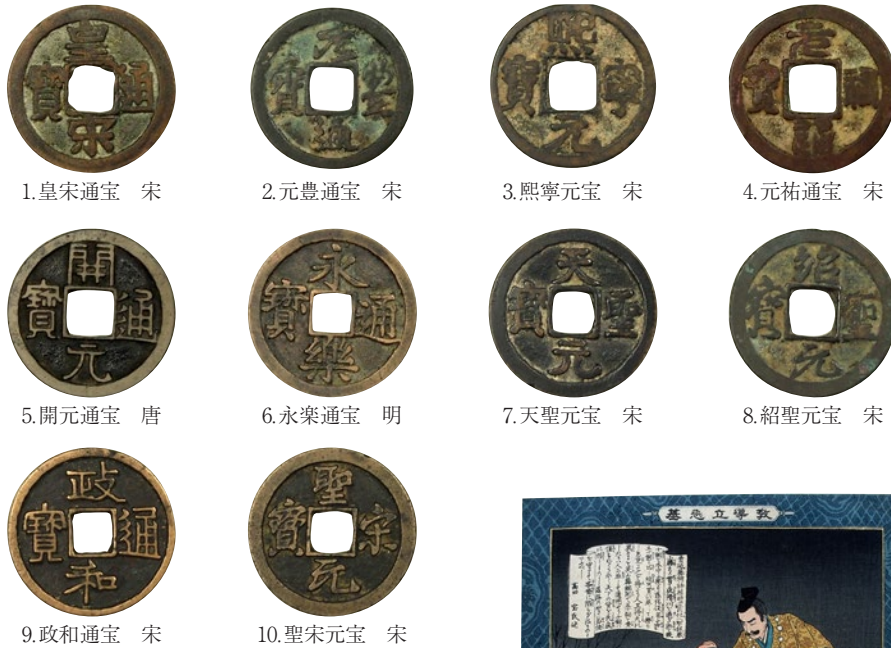
和同開珎の発行(708年)後、国家はこれが広く使われるよう、税を銭貨で納めるなどの流通政策をとりました。その後も、奈良時代に2種類、平安時代に9種類の銅銭が新たに発行されました。これらの銭貨は呪術的にも用いられ、現世や死後の世界へのさまざまな願いを込めて、建物の基礎部分やお墓に埋納された事例も多くみられます。

ただ、9世紀末になると平安京などの大規模な造営工事も終わり、国家が銭貨を支払う機会が減少し、人々が銭貨を使つてものを買うことも少なくなつていきました。さらに、官営鉱山の生産量の落ち込みや銭貨の質の低下などの要因も重なり、10世紀半ばの乾元大宝発行の後、国家は銭貨の発行を停止しました。以降、約600年間、日本では国家による貨幣は発行されませんでした。銭貨が発行されなくなつてからは、以前から使われていた米や絹・布が主に貨幣として使われるようになりました。

発行年代順に並んだ12種類の銭貨をみると、次第にサイズが小さくなり、文字も不鮮明になっていくことがわかります。また、成分を調べてみると、銅が不足した時期に発行された延喜通宝や乾元大宝は、鉛の割合が非常に高かったこともわかっていきます。

海を越えてきたお金

— 中世の渡来銭 —



1. 皇宋通宝 宋
2. 元豊通宝 宋
3. 熙寧元宝 宋
4. 元祐通宝 宋
5. 開元通宝 唐
6. 永樂通宝 明
7. 天聖元宝 宋
8. 紹聖元宝 宋
9. 政和通宝 宋
10. 聖宋元宝 宋

【上・渡来銭 国内で大量に出土する上位10種類】

※銭貨の名称と発行王朝名(数字は順位)

国内で出土する渡来銭のなかでも宋銭は特に多い。日宋貿易などを通じて大量に輸入された銭貨は仏具などにも造りかえられた。

【右・錦絵「教導立基 青砥藤綱」井上探景作 1885年】

鎌倉時代の武士青砥藤綱が、川に落とした銭貨10文を探すために、松明を50文で買い、探させた逸話を描いたもの。藤綱は「落とした10文は少ないが、これを失えば天下の貨幣を永久に失う。購入に要した50文は自分にとっては損になるが、他者にとっては益になる」と話したと書かれている。鎌倉時代(13世紀頃)に銭貨が浸透していたことをうかがわせる。



おかね今昔物語

「使う」「貯める」…それだけではありません
おかねは「昔」の暮らしのありよう
それを「今」に伝える物語です



〈日本銀行金融研究所貨幣博物館〉

東京都中央区日本橋本石町 1-3-1
<http://www.imes.boj.or.jp/cm/>

日本では10世紀半ばに銭貨が発行されなくなり、米や布などが貨幣として使われるようになります。その後12世紀半ばの平安時代末期になると、中国から大量の銭貨が流入するようになります。この背景には、それに先立つ11世紀に、中国で年間十億枚を超える大量の銭貨が造られたという当時の事情があります。

海外から日本に入ってきた銭貨を渡来銭といいます。国家は当初、その使用を認めていませんでしたが、次第に人々に受け入れられ、広く使われるようになりました。

日本で渡来銭が浸透した理由としては、1枚が1文として使われ、誰にでもわかりやすく便利であったこと、それまで貨幣として使われていた米や布などに比べ、軽量で持ち運びが容易であったことなどが考えられます。

13世紀に入ると、国家も渡来銭の使用を認めました。人々は年貢を米の代わりに銭貨で納めるようになり、輸送の負担が大幅に軽減されました。また年貢であった米などの生産物が商品として市で活発に取り引されるようになります。これに伴い、銭貨に対する需要も更に高まってきました。日本ではその後17世紀まで国家が貨幣を発行することとはなく、渡来銭が活発な商品流通を支えていきました。

埋められた銭貨

— 銭貨使用の浸透と混乱 —



【大量の銭貨が入って出土した壺(宮崎県出土)】

当館所蔵の壺は、渡来銭66種、約7,700枚が入った状態で出土したもの。銭貨の種類から16世紀頃に埋められたと考えられる。



【永楽通宝(明銭)(左)と真似て造られた銭貨(右3点)】

永楽通宝のなかでも、正式に造られた永楽通宝と真似て造られた銭貨では、品質(大きさや文字の見え方など)に大きな違いがあったことがわかる。

おかね今昔物語

「使う」「貯める」…それだけではありません
おかねは「昔」の暮らしのありよう
それを「今」に伝える物語です



〈日本銀行金融研究所貨幣博物館〉

東京都中央区日本橋本石町 1-3-1
<http://www.imes.boj.or.jp/cm/>

13世紀以降の日本では、中国から流れ込んできた銭貨(渡来銭)の使用が浸透していました。14世紀に入ると、銭貨は各地で壺などに入れて大量に埋められるようになりま
す。これは渡来銭が国内で広く流通していたことを示して
います。大量の銭貨が埋められた理由として、貯蔵・貯蓄、
戦争や災害時の緊急避難、まじないなどの宗教的な意味合
いといった様ざまな説が挙げられます。
当時の人々の暮らしをみると、たとえば大工の賃金は1日
およそ100文、都市の茶店では、抹茶を「服1文で飲むこと
ができました。
14世紀半ば以降、中国からの銭貨の流入が減少し、銭貨
が不足しました。そのため中国の銭貨を真似た銭貨が民間
で造られました。15世紀後半には、質の良い銭・悪い銭な
ど、様ざまな銭貨が同時に流通し、区別され選り好みされ
るようになりました。それまで1枚が1文として使われて
きた銭貨は、品質や種類によつて異なる価値を持つようにな
ります。その結果、支払いや納税などの際に特定の銭貨の
受け取りが拒否されるなど、銭貨の使用が混乱しました。
そして、16世紀後半になると、西日本では銭貨に代わって米
が再び貨幣として使われるようになりました。

石州銀

— 鉱山開発と銀貨の登場 —

金や銀は、古代より贈答に使われたり、工芸品の原料として利用されてきましたが、16世紀に各地で鉱山開発が行われ産出量が増えると、金や銀で貨幣がつくられるようになりました。こうした金貨や銀貨は、高額商品の取引や軍資金、恩賞などに利用され、社会に浸透していきました。

2007年にユネスコの世界遺産に登録された石見銀山（島根県大田市）は、鉱石から高品位の銀を取り出す精錬技術「灰吹法」を導入し、国内の鉱山開発の先駆けとなりました。石見銀山から産出した銀でつくった銀貨は「石州銀」と呼ばれています。ただし、重さが一定ではなく、使用の際に重さを量り、必要に応じて切って使われました。

16世紀から中国やヨーロッパ諸国で銀の使用が増加し、石州銀は海外へ輸出されました。石見銀山から大量に産出される良質な銀は海外でも有名となり、16世紀の海外の地図にも石見の地名が銀鉱山として記されています。

石見銀山の支配権をめぐる戦国大名は激しい争奪戦を繰り返して、最終的には江戸幕府が直轄することとなりました。その頃には、石見銀山以外にも多くの銀山があった西日本を中心に銀貨の使用が浸透しており、江戸幕府も引き続き銀貨を発行していくこととなります。

【石州銀】

表面には文字のない長方形の極印が左右に規則的に打たれている。当時の銀は、鉱山によって品質が異なっていたため、極印で品質を証明した。写真の資料は縦約16cm、重さ約370g。



【切って使われた石州銀】

表面に長方形と「御公用」と書かれた極印が打たれている。極印は、銀が切って使用された場合にもわかるように複数箇所にある。大きさ縦約6cm、重さ約90g。



おかね今昔物語

「使う」「貯める」…それだけではありません
おかねは「昔」の暮らしのありよう
それを「今」に伝える物語です



〈日本銀行金融研究所貨幣博物館〉

東京都中央区日本橋本石町 1-3-1
<http://www.imes.boj.or.jp/cm/>

甲州金

— 金貨をつくる技術と貨幣単位 —



二分一朱金



露一両金



吉一分金



角一分金



一分朱中糸目金

【甲州金】

16世紀後半から江戸時代初期頃と推定される甲州金。碁石、円形、四角の形状のものがあ、一つひとつに額面を表わす極印が打たれた。額面には、端数をもつものもあつた。1両 = 4分 = 16朱 = 64糸目。写真の露一両金は縦約2cm、重さ約15g。

東北地方などでは古代から砂金や金塊などが採られていましたが、16世紀以降、鉾石から金を取り出す精錬技術の発達によって金が量産され、形を整えた金貨がつくられるようになりま。16世紀中頃以降、武田氏の支配していた甲斐（現在の山梨県）では、金山の開発が進み、豊富に産出した金で「甲州金」といわれる金貨がつくられるようになり、これが武田氏の勢力拡大の背景になつたと考えられています。甲州金の製造には、金山の経営、金の精錬や品位の鑑定の技術、重さを正確に量るための秤の製造などの専門的な技術をもつた集団が関わっていました。

甲州金の始まりははっきりしませんが、当初は使用する都度、重さを量って使う金貨でした。武田氏時代の金貨として山梨県では、板状の金貨や後の時代につくられた「甲州金露一両金」と同じ碁石状の金貨が出土しています。

その後、甲州金は形や大きさが統一され、四進法の貨幣単位「両」「分」「朱」「糸目」が表示されるようになりました。こうした甲州金の製造技術や四進法の貨幣単位は、江戸幕府が発行する金貨に受け継がれました。甲州金は、貨幣制度が全国的に統一された後も、18世紀前半まで例外的に甲斐の中に限り使用が許されました。

おかね今昔物語

「使う」「貯める」…それだけではありません。おかねは「昔」の暮らしのありよう、それを「今」に伝える物語です。



〈日本銀行金融研究所貨幣博物館〉

東京都中央区日本橋本石町 1-3-1
<http://www.imes.boj.or.jp/cm/>

黄金の分銅



【桐】
「桐」極印、菊花地紋



【吉】
「吉」極印、布目地紋



【亀甲桐】
「亀甲桐」極印、布目地紋



【定】
「定」極印、石目地紋

尾張徳川家伝来の「吉」「桐」「亀甲桐」「定」の極印をもつ小分銅。分銅金の形は、秤のおもり「分銅」に由来する。分銅の形は江戸時代にはお金や富を表すものとして、両替商の看板などに使われ、今日でも銀行の地図記号として使われている。

おかね今昔物語

「使う」「貯める」…それだけではありません
おかねは「昔」の暮らしのありよう
それを「今」に伝える物語です

16世紀後半から17世紀頃にかけて、非常時の備蓄用として分銅型の金塊「分銅金」が作られました。分銅金には、大型の「大分銅」と小型の「小分銅」がありました。

大分銅は現存しませんが、豊臣秀吉や徳川家康らが、彫金師の後藤家に命じて作らせたことがわかっています。一方、小分銅は、誰が作らせたのかなど、作られた経緯はよくわかっていません。ただ、この頃、権力者とながりをもち、金貨や大分銅の製作に関わっていた後藤家が、小分銅の製作にも携わっていた可能性も考えられます。

小分銅の金の品位は95%前後で、表面の中央に刻まれた極印の違いから5種類が知られています。貨幣博物館では、そのうち「吉」「桐」「亀甲桐」「定」の極印をもつ4種類の小分銅を所蔵しています。

小分銅について記された史料として、徳川家康の遺産分与に関するものがあります。家康の九男で尾張徳川家の始祖となった徳川義直に分与された遺産のなかには、小判などの金貨とともに、重さ100目(約375グラム)の小分銅が含まれていたことがわかっています。貨幣博物館で所蔵する小分銅は尾張徳川家伝来で、家康の遺産として尾張徳川家に分与されたものと考えられます。



〈日本銀行金融研究所貨幣博物館〉

東京都中央区日本橋本石町 1-3-1
<http://www.imes.boj.or.jp/cm/>

家康のつくった貨幣制度



【慶長大判(A)・慶長小判(B)・慶長一分金(C)】(1601年発行)
金貨は小判1枚の1両を基準とし、それ以下を4進法の単位で表す計数貨幣(金1両=金4分)。大判の表面には、墨で額面「拾両」と製造者「後藤」のサインがある。小判や一分金の表面には「壹両」・製造者の「光次」・扇に桐の極印がある。



【寛永通宝(F)】
(1636年発行)
1枚が1文の計数貨幣。江戸初期は銀4,000文=金1両。

【慶長丁銀(D)・慶長豆板銀(E)】
(1601年発行)
銀は重さを量って使う秤量貨幣で基本単位は匁(1匁=約3.75g)。表には製作者の保証を示す大黒像、「常是」と「宝」の極印が一面に打たれている。豆板銀は小額取引のためにつくられた。江戸初期は銀50匁=金1両。



おかね今昔物語

「使う」「貯める」…それだけではありません
おかねは「昔」の暮らしのありよう
それを「今」に伝える物語です



〈日本銀行金融研究所貨幣博物館〉

東京都中央区日本橋本石町 1-3-1
<http://www.imes.boj.or.jp/cm/>

徳川家康は、16世紀末から17世紀にかけて、全国を治めるため様々な制度を整備していくなかで、全国の鉱山を直轄化し、金銀貨を独占的に製造する体制を整えていきました。そして、様式や品位・形態・重さを統一した慶長大判・慶長小判や慶長丁銀などの金銀貨を発行しました。

金貨のうち、大判は、豊臣秀吉のつくらせた天正大判の形状が引き継がれ、彫金師である後藤家が引き続き製造にあたりました。小判や一分金などは、金貨の表面に筆で製造者や額面を書く方法から、文字などを刻む極印に変更され、量産がしやすくなりました。家康は、小判を製造する「金座」の中心人物に後藤家の後藤庄三郎を抜擢し、金貨を安定的に供給する体制をつくりました。

一方、銀貨は16世紀半ば以降、西日本を中心に東アジアとの貿易の中で広く使用されており、家康は銀貨を引き続き使用することとしました。それまでも銀貨の製造にあたっていた湯浅作兵衛常是に慶長丁銀をつくらせ、金貨と同ように、「銀座」での銀貨の製造体制を整えました。

銅銭「寛永通宝」は家康の死後、1636年に発行されました。これら江戸幕府による金・銀・銅貨は、約6百年ぶりに国家により発行された貨幣でした。

佐渡金銀山の開発



【佐州金銀採製全図】
佐渡金銀山での作業工程が描かれた絵巻物(19世紀頃)。鉱石を掘る様子や鉱脈を掘り進める際に湧き出る水を排水する様子がわかる。



【佐渡小判】
佐渡で製造されたとされる小判。佐渡で作られた元禄小判以降の小判の裏面には、「佐」の極印が打たれている。

おかね今昔物語

「使う」「貯める」…それだけではありません
おかねは「昔」の暮らしのありよう
それを「今」に伝える物語です



〈日本銀行金融研究所貨幣博物館〉
東京都中央区日本橋本石町 1-3-1
<http://www.imes.boj.or.jp/cm/>

16世紀以降、日本国内では金銀銅などの鉱山開発が盛んになりました。特に、佐渡は金銀の埋蔵量が豊富で、16世紀後半から採掘がはじまりました。17世紀に入ると、徳川家康が佐渡を直轄領とします。

金や銀は、銅や硫黄、鉄などの様々な物質と結合しており、それぞれを分けて金や銀を取り出す必要があります。そのため江戸幕府は、最新の技術を導入して佐渡の相川金銀山を中心に開発を進めました。江戸時代前半に相川金銀山は全盛を迎え、町や湾岸も整備されていきましました。佐渡は江戸時代を通じておよそ金40トン、銀1800トンを産出した日本最大の金銀山の島でした。

また、佐渡では、17世紀前半に江戸幕府から小判の製造が認められ、江戸に置かれていた金貨の製造に携わる金座の出張所がつけられました。

貨幣博物館所蔵の『佐州金銀採製全図』には、金銀山の中で、火を灯しながらタガネで鉱石を採掘し、湧き出る水を排水する様子、金銀の製錬や小判の製造などの工程が描かれています。このような絵巻物は、複雑な金銀山での作業をわかりやすく伝えるために、18世紀以降、佐渡奉行らが交代するたびに描かれたとされています。

日本で最初の紙幣

山田羽書



【山田羽書】
1600年頃。下部には、「この羽書と引き換えに銀を渡す」との趣旨の文言がある。

【宇治羽書と原版】
17世紀。山田羽書と同じく伊勢神宮の御師の住む門前町で発行された「宇治羽書」と同羽書の朱印部分の原版。



おかね今昔物語

「使う」「貯める」…それだけではありません
おかねは「昔」の暮らしのありよう
それを「今」に伝える物語です

日本最初の紙幣は、1600年頃から、伊勢神宮の門前町山田で発行されるようになった山田羽書であるとされています。山田羽書は、神職でもあった商人（御師）により、重さを量って使う秤量銀貨である丁銀の釣り銭の代わりに札（私札）が発行されるようになったもので、「羽書」は端数の金額の書き付けを意味します。御師は参宮の客を自邸に案内して宿を提供し、伊勢参りの便宜をはかる等、この帯の経済にも深くかかわっていました。山田羽書は彼ら御師の経済的信用力に基づいて発行され、それが紙幣として流通するようになっていきました。

山田羽書はその後、江戸幕府の公認を得るなど発行の制度を整えていき、江戸時代を通じて製造・発行されました。また、山田羽書に続き、伊勢や近畿地方をはじめとして、私札が発行されるようになったほか、各藩の藩政の確立とまつて、西日本を中心に藩札の発行と利用も広がっていきました。

山田羽書の表面には、「丁銀」「五（伍）分請取」の文字と発行者の印が押されています。山田羽書にみられる縦長の紙に墨書と小型の印を押した札の様式は、周辺の私札や藩札などに踏襲されていくこととなります。



〈日本銀行金融研究所貨幣博物館〉
東京都中央区日本橋本石町 1-3-1
<http://www.imes.boj.or.jp/cm/>

金座と小判のつくりかた



【金座絵巻】

江戸の金座における小判の製作用業を描いた絵巻物。

(上)小判を重ねて側面を小槌で打ち、形を整えている場面。

(下)「色付」(色揚)のために薬品を塗って焼くという表面処理を行っている場面。



【享保小判】(右) 1714年発行 金87%

【元禄小判】(左) 1695年発行 金57%

改鑄により品位が異なる小判だが、「色付」(色揚)処理が施されているためいずれも金色に輝いて見える。

おかね今昔物語

「使う」「貯める」…それだけではありません
おかねは「昔」の暮らしのありよう
それを「今」に伝える物語です



〈日本銀行金融研究所貨幣博物館〉

東京都中央区日本橋本石町 1-3-1
<http://www.imes.boj.or.jp/cm/>

江戸時代には、幕府は大判・小判や二分金などの金貨を発行していました。主に恩賞や贈答用に使用された大判は「大判座」でつくられ、広く金貨として使われた小判や二分金などは「金座」でつくられました。金座は、彫金師の流れを汲む後藤庄三郎により組織され、代々後藤家が監督しました。金座と後藤家の屋敷は、東京の日本橋にある現在の日本銀行本店のあたりにありました。

金座絵巻には、原料となる金の品位を鑑定する様子や、職人達が小判をつくる工程が細かく描かれています。小判は、主に金と銀の合金でつくられ、金の含有量は、度重なる改鑄によって87～56%の間で変化していました。しかし、いずれの時代の小判も金色に輝いて見えます。これは、小判の表面に色付(色揚)という化学的な処理をして、表面だけは金の品位を高めていたためです。

小判のつくりかたをみると、まず金と銀の含有量を調整した棹金(さおきん)地金をつくり、それを叩き伸ばし、小判二枚の重さに合わせて切ります。その後、形を整えて表面に模様と極印を打ち、表面の品位を高める処理をして金色に輝く小判に仕上げました。こうしてつくられた小判は、幕府が公式に発行する貨幣として世の中に出て行きました。